

学生時代を含め、33年余をこの薬学部で過ごしてきた。曾て図書館は閲覧室の代名詞であった。静謐で一種厳肅な雰囲気漂い、適度の緊張感と落ち着きが得られた。精神を集中させ学習意欲を充める賦活効果があった。学問の聖堂という言葉が当て嵌まった。

図書館のイメージは明らかに変わりつゝある。閲覧室は死語になるかも知れない。多目的研究・研修室と

して変貌を遂げ主役の座を維持していくのであろう。精神の高揚と充足が与えられる場であることは不変である。本質的なものが失なわれることはない。

午後8時、閉館時間になり私は図書館を後にした。一抹の淋しさは過ぎたもの、安堵感があった。

(薬学部教授 薬物活性学)

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介5

重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)

工藤敬一

今回は、南北朝の争乱の中で、一貫して南朝方の有力武将として活動し、常に恩賞を望みつつも、十分酬いられることなく、欲求不満のまま生涯を終えた恵良(阿蘇)惟澄の征西府宛の恩賞請求の言上状の草案を紹介する。

恵良惟澄は阿蘇氏の庶流で阿蘇末社の甲佐神社領を多くふくむ益城郡一帯に大きな勢力を持っていたが、本社大宮司惟時の女婿となって本宗家に入り、惟時没後は一時本社大宮司ともなった。元弘3年(1333)の鎌倉幕府討滅以来、彼は活発な軍事行動を展開する。建武3年(1335)には、九州から上京した尊氏に逐われて山門に避難した後醍醐天皇に神器を守って随従、帰国後は合志幸隆に奪われた菊地本城の回復を援け、庶子の武光を菊地氏の惣領に押し上げた。さらに征西将軍宮懐良親王の肥後入国の条件を整えるため肥後南部を中心に各地を転戦し、正平3年(1348)正月にはまっ先に親王を宇土津に迎え、以来菊地征西府の時代その柱石となった。

その間、豊後国の日田荘や玖珠荘、肥後国の守富荘、肥前国の曾根崎荘などを恩賞地(兵糧料所)として付与されたけれども、実質的にその地を支配し得た所はきわめて少なく、征西府への欲求不満はつのるばかりであった。彼の征西府に対する軍忠確認と恩賞請求状は、今日確認されるだけでも興国6年(1345)から正平16年(1361)まで15通を数える。本状はその中の一通の草案である。

本状の要旨はほゞ次のごとくである。

「謹んで言上します。早く元弘(鎌倉幕府討滅)以来数百度の合戦の功に対し恩賞地をいたゞきたい。自分是不肖の身であるが、最初から一貫して一門・他門の者を率いて南朝方(宮方)のために戦って来た。それ

なのに、近來降参して味方になった者が恩賞地をもらっているにもかかわらず、自分は一箇所の兵糧料所も与えられていない。そのためすっかり疲労(窮乏)してしまい、これでは今後の奉公はおぼつかない。自分の本領やかつてもらった新恩地は、惣領の惟時が官方についたので、その支配するところとなり、自分は知行できなくなってしまった。またこの間しばらく支配して来た阿蘇社領も昨秋社家に返してしまったので、いよいよ窮乏状態となった。どうか肥後国でも他国でもよいから実際に支配出来る料所をいたゞきたい。それによってすっかり窮乏化している家来たちを救い、忠勤を励みたい。次に守富荘(現下益城郡富合町一帯)

阿蘇良恵 惟澄言上状草案

肥後國阿蘇筑後守惟澄謹言上

早欲依自元弘以來數百度合戰殊功下賜祈所、弥抽忠勤子細事

右、元弘以來合戰注文先進了、既及 奏達歟、惟澄雖爲不屑之身、自取初

云軍忠、令扶持自門他門、于今無異變之儀、而或降参之輩、或 御方□□

忠功之族、各賜祈所、雖施面目、於惟澄者、不下賜一ヶ所祈所、依其身疲

勞、不能不斷祓候事、似失前々忠勤、又於本領新恩者、惟時令参上御方之

間、不能當知行、隨而此間知行内免田等、自去年秋之比、悉還付社家之

間、弥及疲勞者也、然間、下賜當國他國之内可當知行祈所、令扶持多年疲

勞軍勢、弥可抽向後忠勤□、

守富庄事、爲御方一同之評議、令拜領 綸旨令旨之處、河尻七郎依令降

参、未能知行、於此所者、河尻七郎雖知行、是偏 朝敵高氏所死行也、於

惟澄者、爲御方一同之評議、拜領 綸旨令旨之間、念□□爲預有道之御

成敗。粗言上如件、

は、官方一同の評議で自分が料所として拜領した所であるが、当知行人の河尻七郎が官方に降参したので、自分は未だに知行出来ないままになっている。河尻氏の知行は朝敵尊氏の宛行によるものである。それに対し自分は、御方一同の評議で当荘の支配権を認める論旨・令旨を拜領しているのである。どうか道理ある成敗をいただき、よって一層の忠勤を励みたい」

この文章は草案で年紀を欠くが、他の関連資料からみて正平11年(1356)末から同13年(1358)初頭までに比定できる。というのは、正平11年6月の惟澄申状があつて、守富荘は興国2年(1341)に自分が拜領の令旨をもらったが、現在知行している河尻廣覚が官方に付き、その子七郎が征西府に出仕したため、自分の拜領は有名無実となっている、廣覚の権利は朝敵から与えられたものであるのに対し、自分は軍忠の功によるものであるから、自分の権利を保証して欲しい、と申請している。そして正平13年8月13日に、惟澄の主張を認める三度目の征西將軍官の令旨が出されているからである。

ところで、恩賞としての兵糧料所は敵方の土地を奪っ

て与えられる。しかし敵であった者も降参すれば味方の軍事力となる。したがっていったん兵糧料所として給与されても、その土地の当知行人が降参すると、簡単に没収することはできず有名無実となることが多かった。中世には長年の当知行権はつよい権利として尊重されたからなおさらであった。そこに“降参半分の法”が成立する。すなわち、そのような場合には半分为当知行人に半分为新給人に与えるという解決法である。この場合も、さきにあげた正平13年8月13日の征西將軍官令旨には、「恵良筑後守惟澄申兵糧料所肥後国守富庄半分地頭職事」と書かれ、惟澄に認められたのは半分の権利であった。

しかし正平14年になっても河尻七郎は征西府の命令に従わず、結局惟澄の守富荘支配は実現しなかったのではないと思われる。そして先述のように惟澄の執拗な恩賞請求も正平16年をもって終る。そして懷良親王と菊地武光を中心とする大宰府征西府が全盛時代を迎える時、阿蘇氏は惟澄の子息惟村と惟武が北朝方と南朝方に分れて争うことになる。

(文学部教授 国史学)

退官記念に絵画を寄贈

去る5月12日、今年3月教育学部を定年退館された東政美名誉教授より絵画「GR・BL」(100号)一点の寄贈を受けた。

四ヶ月をかけて制作されたこの作品は、1971年に完成されているが、全体にグレーの色調が強く東名誉教授によれば、これは当時のベトナム戦争の影を色濃く表わしているものであるとの事である。

この作品は附属図書館「自由閲覧室」に展示され、入館者のひとときの憩いになっている。



本学教官寄贈著書紹介

(中央図書館)

日沼頼夫名誉教授

日沼頼夫対談集

日本の医学 上巻(内科系)、下巻(外科系)

日沼頼夫他著 最新医学社 1992.11

上出健二教授(教・被服学)

繊維産業発達史概論

上出健二著 日本繊維機械学会 1993.7

柳治男教授(教・教育社会学)

学校のアナトミア

ーヴェーバーをとしてみた学校の実像ー

柳治男著 東信堂 1991.10

山口隆男助教授(理・臨海実験所)

シーボルトと日本の博物学 甲殻類

山口隆男編 日本甲殻類学会 1993.3

医学部衛生学教室

三浦創教授退官記念誌

熊本大学医学部衛生学教室 1993.4

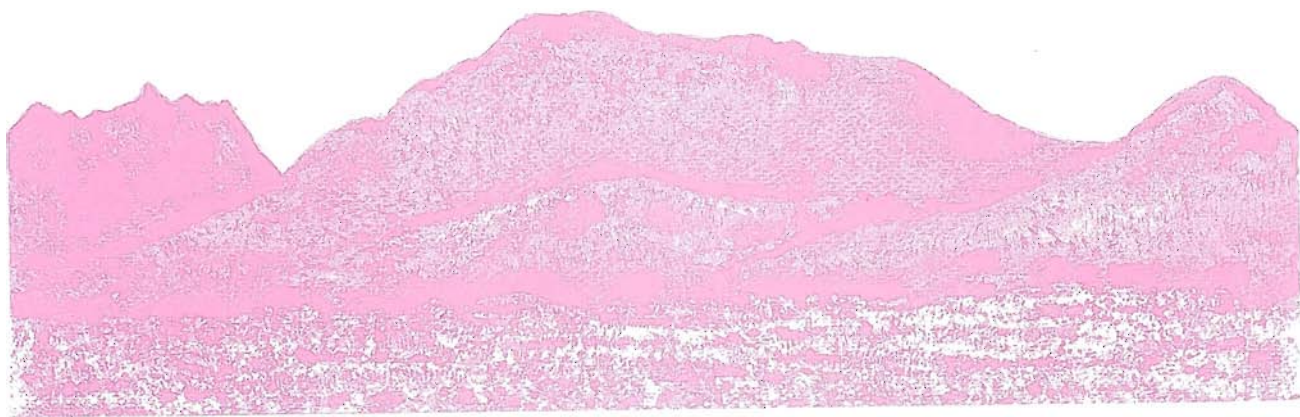
北野 隆教授(工・建築学)

城郭・侍屋敷古図集成 熊本城

北野隆著 至文堂 1993.4

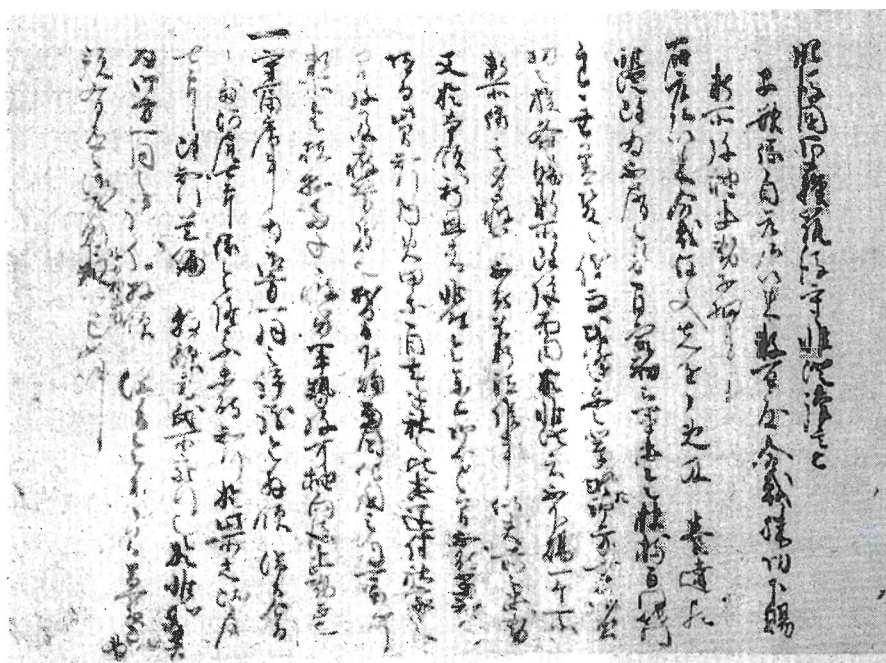
東光原

熊本大学附属図書館報



Kumamoto University Library Bulletin, No.6, Oct. 1993

目次	附属図書館長に就任して
	—図書館の現状と当面の課題—
	閲覧室にて
	シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介 5
	—重要文化財 阿蘇家文書（34巻36冊）—



阿蘇 貴 惟澄言上状草案（阿蘇家文書より）本文に解説